

## 中学生の電子いじめ加害行動に関する研究

### Cyber bullying in junior high school students

黒川 雅幸

Masayuki KUROKAWA

(福岡教育大学教育学部)

(平成21年8月25日受理)

#### 要 約

本研究の目的は、電子いじめ加害行動に関して明らかにすることだった。中学校1, 2年生343名を対象に、質問紙調査を実施した。因子分析の結果、電子いじめは、Eメールによるいじめ、携帯カメラによるいじめ、インターネットによるいじめ、の3つに分類された。電子いじめの生起頻度は、伝統的いじめと比較して、多くはないことが明らかとなった。階層的重回帰分析の結果、直接的いじめ、間接的いじめはそれぞれEメールによるいじめやインターネットによるいじめを予測した。携帯カメラによるいじめは、直接的いじめのみ予測因となることが示された。これらの結果から、伝統的いじめ加害行動をする生徒は電子いじめ加害行動もする可能性が高いことが示唆された。さらに、伝統的いじめ加害行動に加えて、Eメールによるいじめ加害行動の予測因としてCMCへのポジティブな評価が高いことが影響していることが示された。また、インターネットによるいじめ加害行動の予測因としては、匿名性の好みがあることも影響していることが示された。

キーワード：電子いじめ、伝統的いじめ、コミュニケーション・チャネル、匿名性

#### 問題と目的

いじめの発生件数は近年横這い状態にあり(文部科学省, 2007a), いじめという社会問題は依然として解決に至っていないのが現状である。いじめ被害は精神的苦痛を伴うため(e.g., 坂西, 1995; Rigby, 1998), 学校現場では早急に解決していくことが求められている。

これまでの研究では、「仲間はずれ, 無視, 悪口」「いやがらせやいたずら」「叩かれたり, 蹴られたり」といった手口でいじめが起きていることが多いと報告されている(江川, 1985; 岡安・高山, 2000)。しかし, 近年のいじめの形態は, 従来とは異なり, 携帯電話やインターネットを用いたいじめが行われるようになってきていると指摘されている(文部科学省, 2007a)。

2000年頃から携帯電話やインターネットの普及が進み(総務省, 2006), その影響は子どもにまで及んでいる。自分の携帯電話を所有したり,

インターネットを使用したりする子どもが増えてきている(文部科学省, 2007b; 斎藤, 2005; 高田・西田, 2003)。こういった携帯電話やインターネットの普及は, 学習環境の向上や子どものたちの安全を図るなど, 子どもたちにとって有益な結果をもたらしたが, 一方では, 新たないじめの形態を生み出すといった問題ももたらした。

Raskauskas & Stoltz (2007) は, 叩いたり, 蹴ったり, 無視したりするような従来型のいじめを伝統的いじめと呼び, インターネットや携帯電話を用いたいじめを電子いじめとして両者を区別している。電子いじめは, 『侮辱・脅かす・嫌がらせ・脅迫などを行うのに, 電子機器を用いて行ういじめ』と定義されている。電子いじめが伝統的いじめと大きく異なる点は, 学校以外であってもいじめが行われることである。電子いじめに関連する用語は, cyber bullying, electronic bullying, internet bullying, internet harassment,

online harassmentなど多数存在するが (David-Ferdon & Hertz, 2007), 電子機器の全般を使用するいじめである点と, 繰り返し加害行動がされるという点から, 本研究では電子いじめ (cyber bullying) という用語を使用する。

電子いじめには幾つかの種類があることが指摘されている (武田, 2007)。武田 (2007) で指摘されている電子いじめのそれぞれの特徴に関して, 伝統的いじめと関連づけてみていく。なお, 伝統的いじめは, 直接的いじめと間接的いじめに分けられることが明らかにされている (Crick & Grotpeter, 1995; 本間, 2003; Prinstein, Boergers, & Vernberg, 2001)。直接的いじめとは, 叩く, 蹴る, 脅すといったように, 加害者が被害者に身体的・言語的に直接攻撃をするような形態である。一方で, 間接的いじめは, 無視, 仲間はずれのように, 加害者と被害者の他に第3者となる人物を介して行われる。第3者となる人物は, 加害者の仲間であることが多い。人間関係を利用して行われるいじめであることから, 関係性いじめと呼ばれることもある。直接的いじめをする子どもと間接的いじめをする子どもは比較的重複する傾向にあるが (Crick & Grotpeter, 1995), 間接的いじめは人間関係を利用して行われるため, 加害者は人間関係を操作できる立場いる必要や人間関係を把握し, 理解できる能力が必要となる。したがって, 間接的いじめ加害者は他の子どもから人気があったり (Rose, Swenson, & Waller, 2004), 加害行動と社会的知能とに正の相関がみられたり (Kaukiainen, Björkqvist, Lagerpetz, Österman, Salmivalli, Rothberg, & Ahlbom, 1999) といった直接的いじめ加害者にはみられない独自性もあることが指摘されている。

携帯電話を用いたいじめでは, 「うざい」「死ね」「きもい」などの嫌がらせメールを次々と送るいじめがあるという。金銭を巻き上げる恐喝では,

連絡を取るための道具として携帯電話が使用される。携帯電話の特徴の1つと指摘される直接性 (中村, 2001) がいじめ加害行動を助長している。直接性とは, 本人に直接繋がるという特徴のことである。直接性は家族が恐喝の事実を察知することを難しくしていると考えられる。携帯電話の付属機能もいじめの道具として用いられるという。写真を撮影できる機能では, 無理やりタバコをくわえさせたり, 服を脱がせたりして, 弱みを握る写真を撮り, 脅しに使うという。簡単に撮ることができ, それを一括して配信することも可能である。撮影における簡易さや即時的に楽しめることが, 加害行動を助長していると考えられる。これらの電子いじめは, 電子機器を用いなければ伝統的いじめの直接的いじめに分類される内容である (Table 1)。また, 「クラス全員で無視しよう」などの指示メールが回ったりするいじめもあるという。このいじめは, 電子機器を用いなければ伝統的いじめの間接的いじめに分類される内容である。電子いじめをする者は, 伝統的いじめをしている者である可能性が高い。なぜならば, 電子いじめを行った後で報復行為を受ける可能性があることを想定すれば, 電子いじめ加害者と被害者における関係は, 伝統的いじめ加害者と被害者における関係と違いはないと予測できるからである。

インターネットを使いたいじめでは, ブログや掲示版などに実名を出して, 誹謗・中傷をすることがあるという。電子機器を使用しなければ, 直接的いじめに分類される内容と捉えることができる。ただし, 伝統的な直接的いじめと異なるのは, 加害者が被害者からは特定されない場合が多いということである。この点に関して, インターネットによるいじめは, 伝統的いじめにはない特徴を含んでいると言える。インターネットを使いたいじめでは, インターネットに書き込む投稿者の名前を変えることや, 伏せておくことができるため,

Table 1 伝統的いじめと電子いじめの関係

	被害者から 加害者の特定	攻撃形態	直接的	間接的
		電子媒体		
伝統的いじめ	可能	なし	たたく、蹴る	無視、仲間はずし
電子いじめ	可能	E メール	E メールによる嫌がらせ E メールによる呼び出し	E メールによる仲間はずし
		携帯カメラ	携帯カメラによる撮影	
	一般的に困難	インターネット	誹謗・中傷の書き込み	

報復行為を恐れる心配はなく、電子いじめにおける加害者は、必ずしも伝統的いじめ加害者だけとは限らないと考えられる。

いずれの電子いじめに関しても、近年になってみられるようになった形態であり、ごくわずかしかな研究が行われていない。そこで、電子いじめの実態を明らかにすることが第1の目的である。さらに、電子いじめ加害行動は伝統的いじめ加害行動から予測されることを検証することが第2の目的である。

伝統的いじめ加害行動に加えて、電子いじめ加害行動を予測する要因として、電子機器を介したコミュニケーションに関する評価の要因が考えられる。たとえ携帯電話やインターネットが普及しても、それらを使用することにメリットを感じなければ、電子機器を用いることはないと思われる。つまり、電子機器を使用するのは、電子機器を介したコミュニケーションに対するポジティブな評価をもっていることが予測される。Face To Face（以下FTFとする）ではComputer-Mediated Communication（以下CMCとする）と異なり、即時的なやりとりができること、相手の表情や感情を読み取ることができること、コミュニケーション最中の相手や第3者からの評価懸念を感じないこと等が必要である。もし、コミュニケーションにおいてこれらのことが苦手であるのならば、CMCを好んで使用すると考えられる。例えば、学校で不快な思いをさせられた時に、それをFTFで伝えられる生徒もいれば、うまく伝えることができないため、その時の不快な思いをインターネットに書き込む生徒もいるだろう。

また、インターネットの特徴の1つとして匿名性がある（Joinson, 2003）。匿名性により、行為と行為者が切り離されるため、加害行動によって引き起こされる自分へのネガティブな評価や報復行為を回避することが可能になる。インターネット上での匿名性を好んでいることは、インターネットを使ったいじめを起こす要因となると考えられる。

このように、コミュニケーション・チャンネルへの評価や匿名性の好みは、電子いじめを予測する要因の1つであると考えられる。そこで、本研究の第3の目的として、電子いじめに及ぼすコミュニケーション・チャンネルへの評価や匿名性の好みの影響を検証する。

以上から、本研究の目的は、（1）電子いじめの実態を明らかにすること、（2）電子いじめ加害行動が伝統的いじめ加害行動から予測されるこ

とを検証すること、（3）電子いじめ加害行動に及ぼすコミュニケーション・チャンネルへの評価や匿名性の好みの影響を明らかにすること、である。

研究目的（2）および（3）に関する仮説は以下の通りである。1）伝統的いじめ加害行動は、インターネットを使ったいじめを除く電子いじめ加害行動を予測するだろう。2）コミュニケーション・チャンネルへの評価が電子いじめ加害行動を予測するだろう。3）匿名性の好みがインターネットによるいじめ加害行動を予測するだろう。

インターネットいじめが最も多いと指摘されているのは中学生であること（Williams & Guerra, 2007）、伝統的いじめの発生件数のピークは中学校1、2年生であること（文部科学省, 2007a）、携帯電話の所有件数やインターネットの使用が中学生で既に多いこと（斎藤, 2005; 高田・西田, 2003）、を踏まえて、調査対象者は中学生とした。

## 方法

調査対象者 公立中学校2校の1年生180名、2年生163名の計343名であった（男子168名、女子174名、不明1名）。

手続き 質問紙調査を担任教師の下で実施した。

実施時期 2008年2月および3月であった。

質問紙の構成 フェイスシートは、実施にあたっての教示と性別や学年を回答する項目から構成されていた。回答したくない質問項目には回答しなくても良いこと、無記名回答で個人的な結果を担任の先生に知られることはないこと、成績には全く関係がないことを教示し、正直に回答するように促した。(a) 携帯電話の所有：生徒自身が所有している携帯電話の有無を質問した。はい、いいえによる2件法であった。(b) 学校以外でのインターネットの使用状況：学校の授業以外で、パソコンや携帯電話によってインターネットを使用している頻度を尋ねた。まったく使用しない（1点）、週に1～3日（2点）、週に4～6日（3点）、ほぼ毎日（4点）の4件法であった。(a) および(b)の項目は、実態把握の目的で作成した。(c) 電子いじめ加害行動：文部科学省（2007a）や武田（2007）が指摘している内容を参考に表現を改め、作成を行った。「Aのことは無視しよう、といったメールを繰り返し友達に送ること」、「インターネットを使い、誰でも見られるブログや掲示板、ホームページなどに繰り返しAの悪口を書き込むこと」といった内容の15項目から構成されている。ここで質問しているAとは、同じ学校の



生徒であることと限定している。また、15項目の中の3項目は、携帯電話を使用した内容に限られているので、携帯電話を所有していない生徒には回答を求めなかった。まったくしない（1点）～よくする（4点）の4段階評定であった。（d）コミュニケーション・チャンネルへの評価：Kelly & Keaten (2007) の Affects for Communication Channels Scale を参考に作成した。参考にした尺度は、コンピュータ利用者の特性を明らかにするうえで、コミュニケーション・チャンネルの選好がその1つの要因となると考え、その測定を行うために作成されたものである。Increased Preparation and Control (IPC) 因子、Enhanced Meaning and Emotion (EME) 因子、Reduced Anxiety and Inhibition (RAI) の3つの下位尺度（計21項目）から構成されている。この中で内容が重複していると考えられる2項目、中学生が理解することが困難な7項目を除き、3因子に該当する4項目ずつを参考にした。具体的には、「直接話すよりも、自分の考えを準備する時間があるので、メールは楽しいと思う」、「直接話す方がメールよりも気持ちが伝わると思う」、「直接話すよりも、メールでは相手がどのように考えているか、心配しないですむと思う」などである。ぜんぜんあてはまらない（1点）～かなりあてはまる（4点）の4段階評定であった。（e）匿名性の好み：「インターネットのブログや掲示板は、自分の名前を出さなくても書き込めるので好きである」など、インターネットのコミュニケーションについて、情報発信者が特定されないことを好ましいと感じている程度を測定するために、独自に作成した4項目からなる。インターネットのブログや掲示板に書き込みをしたことがない人は回答しないで良いことを教示した。ぜんぜんあてはまらない（1

点）～かなりあてはまる（4点）の4段階評定であった。（f）伝統的いじめ加害行動：本間（2003）の項目を基本に作成し、森田・滝・秦・星野・若井（1999）を参考に「悪口を紙に書いてまわすこと」という1項目補足を行った。「何人かで、繰り返し1人の人をたたいたり、けったりすること」といった直接的いじめに関わる項目と「何人かで、繰り返し1人の人の悪口を紙に書いてまわすこと」といった間接的いじめに関わる項目の両方の内容が含まれる10項目から構成されている。まったくしない（1点）～よくする（4点）の4段階評定であった。

## 結果

各変数の分析 欠測値があるものは、その都度分析から除外した。

携帯電話の所有 はいと回答した生徒は146名（42.6%）であり、いいえと回答した生徒は197名（57.4%）であった。

学校以外でのインターネットの使用状況 まったく使用しないと回答した生徒は69名（20.1%）、週に1～3日と回答した生徒は112名（32.7%）、週に4～6日と回答した生徒は44名（12.8%）、ほぼ毎日と回答した生徒は118名（34.4%）であった。

携帯電話の所有とインターネットの使用状況でクロス集計を行った（Table 2）。

電子いじめ加害行動 因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、2つの因子に高い負荷がある項目が幾つかみられたため、2つの負荷量の差が小さい項目から1項目ずつ除外していき、その都度因子分析を繰り返し行った。最終的に、3項目が削除され、12項目から構成さ

Table 2 携帯電話所有と学校以外でのインターネットの使用状況によるクロス集計表

		学校以外でのインターネットの使用状況				計
		まったく 使用しない	週に 1～3日	週に 4～6日	ほぼ 毎日	
携帯電話所有	はい	20 (5.80%)	33 (9.60%)	13 (3.80%)	80 (23.30%)	146 (42.60%)
	いいえ	49 (14.30%)	79 (23.00%)	31 (9.00%)	38 (32.20%)	197 (57.40%)
	計	69 (20.10%)	112 (32.70%)	44 (12.80%)	118 (34.40%)	343 (100.00%)

れる3因子が抽出された (Table 3)。第1因子に高い負荷をしている項目は、「Aとは遊ばないようにしよう」といったメールを繰り返し友達に送ることなど、Eメールを使ったいじめであるので、Eメール因子と命名した。7項目から構成されており、内的整合性は $\alpha=.86$ であった。そこで、7項目の合計得点をEメールによるいじめ得点とした。平均値は7.93 ( $SD = 2.30$ )であった。第2因子に高い負荷をしている項目は、携帯電話のカメラで、Aの弱みをにぎるような写真を繰り返し撮って、友達と見ることなど、携帯電話のカメラ機能を使ったいじめであるので、携帯カメラ因子と命名した。3項目から構成されており、内的整合性は $\alpha=.83$ であった。そこで、3項目の合計得点を携帯カメラによるいじめ得点とした。平均値

は3.84 ( $SD = 1.54$ )であった。第3因子に高い負荷をしている項目は、インターネットを使い、誰でも見られるブログや掲示板、ホームページなどに繰り返しAが嫌いであることを書き込むことなど、インターネットを使ったいじめであるので、インターネット因子と命名した。2項目から構成されており、内的整合性は $\alpha=.84$ であった。そこで、2項目の合計得点をインターネットによるいじめ得点とした。平均値は2.31 ( $SD = 0.97$ )であった。

コミュニケーション・チャネルへの評価 因子分析 (主因子法, プロマックス回転) の結果, 2因子構造であった (Table 4)。第1因子は, 直接話すよりも, 自分の考えを準備する時間があるので, メールは楽しいと思うなど, CMCに関する

Table 3 電子いじめ加害行動の因子パターン行列と項目平均 (標準偏差)

項 目	F1	F2	F3	M (SD)
<b>第1因子 (Eメール)</b>				
「Aとは遊ばないようにしよう」といったメールを繰り返し友達に送ること	.92	-.15	.12	1.16(0.52)
「Aのことは無視しよう」といったメールを繰り返し友達に送ること	.85	-.11	.08	1.20(0.52)
メールを使って, 何人かで夜遅くに何度もAを呼び出すこと	.78	.09	-.12	1.10(0.40)
何人かで, 1人の人に「うざい」といったメールを繰り返し送ること	.71	.07	-.03	1.18(0.55)
何人かで, 1人の人に「調子にのるな」といったメールを繰り返し送ること	.65	.25	-.10	1.18(0.52)
面白いことを見つけても, 「Aには内緒だよ」といったメールを繰り返し友達に送ること	.64	-.11	.11	1.39(0.74)
何人かで, 1人の人に「きもい」といったメールを繰り返し送ること	.63	.20	-.06	1.19(0.58)
<b>第2因子 (携帯カメラ)</b>				
携帯電話のカメラで, Aの弱みをにぎるような写真を繰り返し撮って, 友達と見ること	-.02	.95	-.03	1.18(0.47)
携帯電話のカメラで, Aが恥ずかしがる写真を繰り返し撮って, 友達に送ること	-.01	.78	.13	1.47(0.72)
携帯電話のカメラで, Aが嫌がるような写真を繰り返し撮って, 友達と見ること	.02	.67	.02	1.18(0.58)
<b>第3因子 (インターネット)</b>				
インターネットを使い, 誰でも見られるブログや掲示板, ホームページなどに繰り返しAが嫌いであることを書き込むこと	.02	-.04	.83	1.27(0.67)
インターネットを使い, 誰でも見られるブログや掲示板, ホームページなどに繰り返しAの悪口を書き込むこと	.00	.15	.80	1.28(0.67)
<b>n=146</b>				
因子間相関				
	F1	F2		
	F2	.51		
	F3	.42	.31	

Table 4 コミュニケーション・チャネルへの評価の因子パターン行列と項目平均 (標準偏差)

項 目	F1	F2	M (SD)
<b>第1因子 (CMCへのポジティブな評価)</b>			
直接話すよりも, 自分の考えを準備する時間があるので, メールは楽しいと思う	.88	-.01	2.43(1.01)
直接話すよりも, 自分の考えをまとめる時間があるので, メールは楽しいと思う	.87	.04	2.47(0.97)
直接話すよりも, メールは言おうとしていることをよく考えられる時間があると思う	.80	.01	2.48(1.01)
直接話すよりも, メールを使った方が集中できると思う	.73	-.18	1.98(0.95)
相手の顔色を気にしないですむので, メールを使う方が直接話すよりも好きである	.70	-.18	1.94(0.83)
メールを使う時は, 自分の気持ちを素直に表現する	.65	.14	2.54(1.04)
メールを使うと, 直接話せないことも言えると思う	.62	.24	2.86(1.08)
直接話すよりも, メールでは相手がどのように考えているか, 心配しないですむと思う	.52	-.02	1.95(0.89)
直接話をするとは, メールよりもお互いにエネルギーを使うと思う	.44	.03	1.95(0.94)
<b>第2因子 (FTFへのポジティブな評価)</b>			
相手の反応を見ることができるので, メールよりも直接話す方が好きである	-.13	.80	3.00(0.97)
直接話す方がメールよりも気持ちが伝わると思う	.12	.74	3.26(0.99)
直接話す方がメールよりも簡単だと思う	.04	.68	3.03(0.99)
<b>n=325</b>			
因子間相関			
	F1		
	F2	-.01	

ポジティブな評価を表した項目から構成される。したがって、CMCへのポジティブな評価因子と命名した。9項目で内的整合性は $\alpha=.89$ であった。そこで、9項目の合計得点をCMCへのポジティブな評価得点とした。平均値は20.64 ( $SD = 6.36$ )であった。第2因子は、相手の反応を見ることができるので、メールよりも直接話す方が好きであるなど、FTFに関するポジティブな評価を表した項目から構成される。したがって、FTFへのポジティブな評価因子と命名した。3項目で内的整合性は $\alpha=.77$ であった。そこで、3項目の合計得点をFTFへのポジティブな評価得点とした。平均値は9.29 ( $SD = 2.43$ )であった。

匿名性の好み 因子分析(主因子法)の結果、1因子構造であった。4項目での内的整合性は $\alpha=.89$ であった。そこで、4項目の合計得点を、匿名性の好み得点とした(Table 5)。平均値は8.78 ( $SD = 3.61$ )であった。

伝統的いじめ加害行動 因子分析(主因子法、プロマックス回転)の結果、2因子構造であったが、2つの因子に高い負荷を示す項目が1つあり、それを除外した(Table 6)。第1因子は何人かで、繰り返し1人の人をおどすことなど、直接的いじめに関するものであったので、直接的いじめ因子とした。4項目から構成され、内的整合性は $\alpha=.80$ であったことから、4項目の合計得点を算出し、直接的いじめ得点とした。平均値は5.81 ( $SD = 2.24$ )であった。第2因子は何人かで、繰り返し1人の人を無視することなど、間接的いじめに関するものであったので、間接的いじめ因子とした。5項目から構成され、内的整合性は $\alpha=.89$ であったことから、5項目の合計得点を算出し、間接的いじめ得点とした。平均値は8.16 ( $SD = 3.45$ )であった。

研究目的に関わる分析 まず、各いじめ加害行

Table 5 匿名性の好みの因子分析結果と項目平均(標準偏差)

項 目	因子負荷量	$M(SD)$
インターネットのブログや掲示板は、 自分が書いたということは誰にも知られないので、気楽だ	.85	2.16(1.03)
インターネットのブログや掲示板は、 自分の名前を出さなくても書き込めるので好きである	.84	2.29(1.02)
インターネットのブログや掲示板は、 匿名にできるので、本当に言いたいことを書くことができると思う	.83	2.20(1.08)
インターネットのブログや掲示板は、 自分の名前を出さなくても書き込めるので、安心だ	.71	2.13(1.03)
$n=171$	二乗和	1.69
	寄与率 (%)	67.7

Table 6 伝統的いじめ加害行動の因子パターン行列と項目平均(標準偏差)

項 目	F 1	F 2	$M(SD)$
<b>第1因子(直接的いじめ)</b>			
何人かで、繰り返し1人の人をおどすこと	.83	-.04	1.40(0.67)
何人かで、繰り返し1人の人をたたいたり、けったりすること	.72	-.09	1.65(0.81)
何人かで、繰り返し1人の人に使いはしりをさせること	.62	.16	1.36(0.66)
何人かで、繰り返し1人の方のものを隠したり、こわしたりすること	.60	.12	1.40(0.69)
<b>第2因子(間接的いじめ)</b>			
何人かで、繰り返し1人の人を無視すること	-.09	.97	1.66(0.86)
何人かで、繰り返し1人の人を仲間はずれにすること	-.06	.87	1.70(0.87)
何人かで、繰り返し1人の方の悪口をいうこと	.01	.82	1.99(1.01)
何人かで、繰り返し1人の方の悪い噂を流すこと	.20	.65	1.61(0.83)
何人かで、繰り返し1人の方の悪口を紙に書いてまわすこと	.15	.47	1.22(0.56)
$n = 332$	因子間相関		
	F 1		
	F 2	.61	

動について、高得点者の度数と割合を各尺度のレンジの中央値、項目平均2点、項目平均1点をカット基準に算出した（Table 7）。

次に、電子いじめ加害行動（Eメールによるいじめ得点、携帯カメラによるいじめ得点、インターネットによるいじめ得点）および伝統的いじめ加害行動（直接的いじめ得点、間接的いじめ得点）は、得点が低い傾向の歪度が正の母集団分布が仮定されている。そこで、これらの変数については、対数変換をして、以降の分析ではその値を用いた。

変数間の相関係数を算出した（Table 8）。直接的いじめ得点とEメールによるいじめ得点（ $r = .35$ ,

$p < .01$ ）、携帯カメラによるいじめ得点（ $r = .55$ ,  $p < .01$ ）、インターネットによるいじめ得点（ $r = .29$ ,  $p < .01$ ）はそれぞれ正の相関がみられた。間接的いじめ得点とEメールによるいじめ得点（ $r = .41$ ,  $p < .01$ ）、携帯カメラによるいじめ得点（ $r = .34$ ,  $p < .01$ ）、インターネットによるいじめ得点（ $r = .30$ ,  $p < .01$ ）もそれぞれ正の相関がみられた。

続いて、電子いじめ加害行動を予測する分析を行うために、直接的いじめ得点および間接的いじめ得点をstep 1の説明変数、CMCへのポジティブな評価得点、FTFへのポジティブな評価得点、

Table 7 いじめ加害行動の高得点者の度数（割合）

いじめ加害行動	レンジの中央値より 高得点の度数	項目平均が2より 高得点の度数	項目平均が1より 高得点の度数
Eメールによるいじめ得点	3 (0.70%)	6 (1.50%)	81 (30.10%)
携帯カメラによるいじめ得点	6 (4.00%)	10 (4.80%)	48 (38.10%)
インターネットによるいじめ得点	11 (1.10%)	18 (4.10%)	39 (14.40%)
直接的いじめ得点	14 (2.60%)	29 (7.10%)	157 (57.30%)
間接的いじめ得点	24 (9.00%)	71 (26.50%)	184 (68.70%)

Table 8 変数間の相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①学校以外でのインターネットの使用状況									
②Eメールによるいじめ得点	.21** (334)								
③携帯カメラによるいじめ得点	.18* (146)	.45** (146)							
④インターネットによるいじめ得点	.28** (335)	.39** (334)	.29** (146)						
⑤CMC へのポジティブな評価得点	.40** (327)	.32** (325)	.24** (144)	.24** (325)					
⑥FTF へのポジティブな評価得点	.11* (332)	-.08 (330)	-.01 (144)	.06 (330)	.02 (325)				
⑦匿名性の好み得点	.31** (171)	.19* (171)	.22* (96)	.32** (171)	.35** (166)	.10 (169)			
⑧直接的いじめ得点	.06 (333)	.35** (325)	.55** (144)	.29** (326)	.08 (319)	-.06 (323)	.26** (165)		
⑨間接的いじめ得点	.19** (334)	.41** (326)	.34** (143)	.30** (327)	.25** (320)	-.02 (324)	.29** (165)	.56** (332)	

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

上段：相関係数 下段：(サンプルサイズ)



匿名性の好み得点をstep 2の説明変数、電子いじめ加害行動を目的変数とした階層的重回帰分析を行った (Table 9)。なお、step 1 とstep 2 で投入する変数による交互作用項間の相関係数が非常に高く、多重共線性の問題があるため、step 3 では交互作用項の投入を行わなかった。また、インターネットによるいじめでも、直接的いじめや間接的いじめと正の相関がみられたことから (Table 8)、Eメールによるいじめや携帯カメラによるいじめ同様にstep 1 に直接的いじめと間接的いじめを投入して分析を行った。目的変数がEメールによるいじめ得点の場合、Step 2 までモデルは有意であった ( $F(5, 152) = 15.18$   $p < .01$ )。直接的いじめ得点 ( $\beta = .30$ ,  $p < .01$ )、間接的いじめ得点 ( $\beta = .29$ ,  $p < .01$ )、CMCへのポジティブな評価得点 ( $\beta = .17$ ,  $p < .05$ ) がそれぞれ有意であった。携帯カメラによるいじめ得点が目的変数の場合、Step 1 までモデルは有意であった ( $F(5, 84) = 24.69$   $p < .01$ )。直接的いじめ得点のみ ( $\beta = .57$ ,  $p < .01$ ) 有意であった。インターネットによるいじめ得点が目的変数の場合、Step 2 までモデルは有意であった ( $F(5, 152) = 11.60$   $p < .01$ )。直接的いじめ得点 ( $\beta = .26$ ,  $p < .01$ )、間接的いじめ得点 ( $\beta = .21$ ,  $p < .05$ )、匿名性の好み得点 ( $\beta = .17$ ,  $p < .05$ ) がそれぞれ有意であった。

## 考察

本研究の目的は、近年問題視されている電子いじめ (文部科学省, 2007 a; 武田, 2007) に関して、明らかにすることであった。本調査でも、自分の携帯電話を所有している中学生が 40% を越えていることやインターネットの高い使用頻度がみられ、新たなメディアの普及は、子どもたちにまで浸透していることが示された。

電子いじめの内容に関しては、武田 (2007) で指摘されているものの、実証的な研究は少なく、実態について明らかにされてこなかった。文部科学省の調査でも (2007 a)、質問項目は 1 項目に留まっている。そこで、文部科学省 (2007 a) や武田 (2007) の内容を踏まえて、電子いじめ加害行動の実態について明らかにした。まず、電子いじめ加害行動の内容に関しては、因子分析の結果、Eメールによるいじめ、携帯カメラによるいじめ、インターネットによるいじめの 3 つの種類に分類された。Table 1 に示されているように、Eメールによるいじめは、直接的、間接的攻撃の両方の形態を含んだいじめであり、携帯カメラによるいじめは、直接的な攻撃形態のいじめである。インターネットによるいじめは、直接的な攻撃形態によるいじめではあるが、伝統的な直接的いじめとは異なり、被害者からは加害者が特定されない場合が多い。

本研究の質問項目では、項目内に「繰り返し」

Table 9 階層的重回帰分析の結果

目的変数/最終 step	R	調整済み R <sup>2</sup>	モデル	説明変数	標準化偏回帰係数
Eメールによるいじめ step2 (n=158) step1→2における $\Delta R^2 = .04^+$	.58	.31	$F(5, 152) = 15.18^{**}$	直接的いじめ 間接的いじめ CMC へのポジティブな評価 FTF へのポジティブな評価 匿名性の好み	.30** .29** .17* .11 .01
携帯カメラによるいじめ step1 (n=90)	.60	.35	$F(5, 84) = 24.69^{**}$	直接的いじめ 間接的いじめ	.57** .05
インターネットによるいじめ step2 (n=158) step1→2における $\Delta R^2 = .04^+$	.53	.25	$F(5, 152) = 11.60^{**}$	直接的いじめ 間接的いじめ CMC へのポジティブな評価 FTF へのポジティブな評価 匿名性の好み	.26** .21* .07 .01 .17*

$p < .01^{**}$   $p < .05^*$   $p < .10^+$



といういじめの定義に沿った内容を予め記述しておいた。つまり、たとえ加害行動の得点が低くても、最低点（1点）でなかったことは、いじめとして認知されるような行動があったと考えられる。電子いじめの生起頻度は、伝統的いじめと比較して、決して多くはないことが示された。この結果は、Li（2006）を支持するものであった。

次に、電子いじめ加害行動が伝統的いじめ加害行動から予測されることについて考察する。階層的重回帰分析の結果、伝統的いじめ加害行動はEメールによるいじめ、インターネットによるいじめを予測することが示された。また、携帯カメラによるいじめに関しては、直接的いじめのみ予測することが示された。伝統的いじめは、インターネットによるいじめを予測することが示されたため、仮説1は一部支持されたと言えるだろう。Raskauskas & Stoltz（2007）でも、電子いじめ加害者と伝統的いじめ加害者が重複することを指摘しており、本研究の結果はそれを支持するものであった。Eメールによるいじめには、電子機器を使わなければ直接的いじめと間接的いじめに該当する内容が含まれており、携帯カメラによるいじめには、直接的いじめに該当する内容が含まれていることから、それぞれの攻撃形態に対応した伝統的いじめが予測因となったと推察できる。また、インターネットによるいじめも、誹謗・中傷の書き込みをするという点からは直接的いじめに分類される内容であるが、不特定多数の他者も閲覧し、第3者を介しているとも捉えられることから、間接的いじめも予測因となったと考えられる。ただし、人間関係を操作しているわけではないため、インターネットによるいじめは間接的いじめに分類することは適切とは言えないと思われる。インターネットでは書き込む投稿者の名前を変えたり、名前を伏せておくことができるため、伝統的いじめ加害者以外であっても加害行動をする可能性が考えられたが、本研究の結果からは、伝統的いじめをしない生徒は、インターネットによるいじめもしない傾向にあることが示された。インターネットによるいじめのみならず、Eメールによるいじめ、携帯カメラによるいじめにも関することであるが、いじめ加害行動の背後にある攻撃性（Roland & Idsøe, 2001）が本研究で得られたような伝統的いじめと電子いじめを結びつけていると考えられる。インターネットでは、加害行動を加害者から切り離すことが可能であり、攻撃者として知られることがなくとも、攻撃性が低い子どもはそもそも加害行動をしないのであろう。

また、伝統的いじめ加害行動に加えて、CMCへのポジティブな評価はEメールによるいじめを予測することが示された。したがって、Eメールによるいじめに関してのみ仮説2は支持された。CMCへのポジティブな評価とFTFへのポジティブな評価は独立であり（Table 4）、負の相関関係にはなかったことから、CMCをポジティブに評価している生徒は、FTFをネガティブに評価しているのではない。このことは、すなわちFTFによるコミュニケーションが苦手であったり、嫌いであったりするからCMCを用いるというよりは、自分が高く評価するチャンネルを選択していると考えられる。携帯電話やインターネットによるメールの簡便さ、自分の言いたいことをまとめられるといった準備のしやすさ、仲間はずれにすることも、その場で仲間の同意が得られるかどうか顔色を窺う必要もないといった電子機器の利点を感じていることなどが、いじめ加害行動を行いやすくさせているのではないかと考えられる。

伝統的いじめ加害行動に加えて、匿名性の好みはインターネットによるいじめを予測することが示された。したがって、仮説3は支持された。掲示板やブログなどの書き込みにおいて、架空の名前を使うことで、行為と行為者が切り離されるため、加害行動をとりながら、加害行動によって引き起こされる自分へのネガティブな評価や報復行為を回避することが可能となる。場合によっては、1人で複数の者を演じ、さも複数の者が攻撃行動をしているかのように見せかけることもできる。このように、インターネットによる匿名性は、加害者にとって被るリスクを最小限に抑えられるので、加害行動を助長していると考えられる。また、インターネットでは、自分のアイデンティティが隠され、攻撃的な行動が引き起こされるとも指摘されており（David-Ferdon & Hertz, 2007）、匿名性はインターネットによるいじめ加害行動を引き起こす重要な要因の1つであった。

本研究は、携帯電話やインターネットの普及と共に問題となっている電子いじめについて論じた。電子いじめ加害行動をする生徒は、基本的には伝統的いじめ加害行動をしている生徒である可能性が高く、さらには、コミュニケーション・チャンネルの選好や匿名性の好みや電子いじめ加害行動を予測する要因の1つとなっていることが示された。電子いじめの研究は少なく、今後は伝統的いじめと電子いじめの規定因と考えられる攻撃性の検討や、加害者のストレス（岡安・高山, 2000）や精神的健康を明らかにしていくことが求められる。

また、電子いじめに対する児童・生徒の認識や、抑制に向けての教師の対応などを検討していかなければならない。

### 引用文献

- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- David-Ferdon, C., & Hertz, M. F. (2007). Electronic media, violence, and adolescents: An emerging public health problem. *Journal of Adolescent Health*, 41, S1-S5 (Supplement).
- 江川玫成 (1985). 小学校児童の集団的いじめに関する調査 (I) —集団的いじめの経緯を中心に— 教育学研究年報, 4, 85-97.
- 本間友巳 (2003). 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, 51, 390-400.
- Joinson, A. N. (2003). *Understanding the psychology of internet behavior: Virtual worlds, real lives*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. (ジョインソン, A. N. 三浦麻子・畦地真太郎・田中敦 (訳) (2004). インターネットにおける行動と心理—バーチャルと現実のはざままで— 北大路書房)
- Kaukiainen, A., Björkqvist, K., Lagerpetz, K., Österman, K., Salmivalli, C., Rothberg, S., & Ahlbom, A. (1999). The relationships between social intelligence, empathy, and three types of aggression. *Aggressive Behavior*, 25, 81-89.
- Kelly, L., & Keaten, J. A. (2007). Development of the affect for communication channelsscale. *Journal of Communication*, 57, 349-365.
- Li, Q. (2006). Cyberbullying in schools: A research of gender differences. *School Psychology International*, 27, 157-170.
- 文部科学省 (2007 a). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 文部科学省 2007 年 11 月 15 日 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/11/07110710/001/002.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07110710/001/002.pdf)> (2008 年 1 月 8 日)
- 文部科学省 (2007 b). 全国学力・学習状況調査 国立教育政策研究所 2007 年 10 月 25 日 <[http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/tyousakekka/gaiyou\\_shou/tyousakekka\\_gaiyou.pdf](http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/tyousakekka/gaiyou_shou/tyousakekka_gaiyou.pdf)> (2007 年 12 月 14 日)
- 森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一 (編著) (1999). 日本のおいじめ—予防・対応に生かすデータ集— 金子書房
- 中村功 (2001). 携帯電話と変容するネットワーク 情報行動の社会心理学 シリーズ 21 世紀の社会心理学 5 高木修 (監) 川上善郎 (編著) 北大路書房 pp.76-87.
- 岡安孝弘・高山巖 (2000). 中学生におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Prinstein, M. J., Boergers, J., & Vernberg, E. M. (2001). Overt and relational aggression in adolescents: Social-psychological adjustment of aggressors and victims. *Journal of Clinical Child Psychology*, 30, 479-791.
- Raskauskas, J., & Stoltz, A. D. (2007). Involvement in traditional and electronic bullying among adolescents. *Developmental Psychology*, 43, 564-575.
- Rigby, K. (1998). The relationship between reported health and involvement in bully/victim problems among male and female secondary school children. *Journal of Health Psychology*, 3, 465-476.
- Roland, E., & Idsoe, T. (2001). Aggression and bullying. *Aggressive Behavior*, 27, 446-462.
- Rose, A. J., Swenson, L.P., & Waller, E. M. (2004). Overt and relational aggression and perceived popularity: Developmental differences in concurrent and prospective relations. *Developmental Psychology*, 40, 378-387.
- 斎藤嘉孝 (2005). 家族コミュニケーションと情報機器—小中学生とその親における携帯電話の使用状況— 情報通信学会誌, 23, 61-68.
- 総務省 (2006). 平成 18 年度版情報通信白書, 19, 182-201.
- 高田泰昭・西田英樹 (2003). 小中学生のインターネット利用状況に関する調査 鳥取大学教育地域学部紀要(教育・人文科学), 5, 45-51.
- 武田さち子 (2007). 現代の「いじめ」の傾向—

犯罪化と携帯電話・インターネットによる

「いじめ」— 児童心理, **61**, 478-482.

Williams, K. R., & Guerra, N. G. (2007).  
Prevalence and predictors of internet  
bullying. *Journal of Adolescent Health*,  
**41**, S 14-S 21(Supplement).

謝辞

教育委員会を始め、ご協力を頂いた先生方に深くお礼申し上げます。

Cyber bullying in junior high school students

Masayuki KUROKAWA (Faculty of Education, Fukuoka University of Education)

This study examined cyber bullying. Participants were 343 junior high school students who answered a questionnaire. Factor analysis identified three factor solutions; E-mail bullying, picture bullying, and internet bullying. Cyber bullying did not arise more frequent than did traditional bullying. Results of hierarchical regression analysis revealed that direct and indirect bullying predicted E-mail and internet bullying. Direct bullying only predicted picture bullying. The results showed that traditional bullies were also cyber bullies. As well as traditional bullying, positive affects for computer-mediated communication predicted E-mail bullying, while preferences for anonymous predicted internet bullying.

**Keywords** : cyber bullying, traditional bullying, communication channels, anonymous